

展覧会紹介：没後1周年追悼展

「文化功労者 三谷吾一の世界—時代を画す沈金加飾の探究者—」…………… 2

展覧会紹介：重要無形文化財保持団体秀作展「日本の伝統美と技の世界」…………… 3

漆の小箱24 漆の加飾—平文—…………… 4

展覧会予告：企画展「ハンス・オン!—輪島塗のわざ—」他…………… 5

INFORMATION…………… 6



三谷吾一《蝶の楽園》2016年改組新第3回日展

没後1周年追悼展「文化功労者 三谷吾一の世界―時代を画す沈金加飾の探究者―」

会期 9月8日(土)～11月5日(月) *会期中無休

輪島市名誉市民・三谷吾一氏は2002年に日本芸術院会員に就任、2015年10月には文化功労者として顕彰され、長らく斯界の先達者として輪島塗を支え続けましたが、2017年7月、惜しまれつつ永眠されました。

少年時代に画家を夢見た三谷氏は、作家としての将来を決意し沈金の道に進みました。22歳で独立したのは独自の表現を飽くことなく追求し、ついにエルジー粉やパール粉を用い、多彩な技法を駆使した幻想的かつ色彩豊かな世界を切り拓きます。その作風が評価され、輪島を代表する作家として足取りを確かなものにしてもなお、作品世界は年を追うごとに若々しく、明るく自由な彩りに満ちあふれたものへと変化を重ねました。

2000年代の後半には「透明感のある幻想的な」三谷作品からさらなる進化を遂げました。変革の要素の一つは金銀箔の大胆な使用方法にあります。《楽園》(図1)では箔片を貼り重ねた金銀地に、真円6つを

透かし背景としました。金、プラチナ、黒漆、さらに鳥や花などのモチーフとの明快な対比が新鮮です。金箔の使用法については日本画家の作品をも研究し、刺激を受けていたこのことです。



図1 《楽園》2007年第39回日展(個人蔵)

《蝶の楽園》(表紙)の舞い遊ぶ10匹の蝶は形に切り抜いた堆漆板で表し、周囲には金とプラチナの箔片が散らされています。

これは樹脂製フィルムにあらかじめ箔を貼り、鉄を入れたものと推測されます。堆漆板は漆を塗り重ねて2.5ミリほどの厚さにし、これを画面に貼り付けたもので、2013年制作の《さえずる》以来、積極的に用いられました。理想の表現を追い求めて、高齢による体力への負荷に決して目をそらすことなく、常に新たな創作を求め続ける姿勢に驚かされます。濃緑の漆の画面と色とりどりの蝶が群れ飛ぶ情景に、夢の中へ誘われるような心地がします。

本展覧会では、近作も交え作品一筋に生き抜いた三谷氏の足跡を振り返ります。作品から流れるやわらかな旋律に耳を傾けていただければ幸いです。(寺尾藍子)

関連イベントのご案内

●第3回漆文化セミナー

テーマ…「文化功労者三谷吾一氏の足跡を振り返る」

講師…三谷慎氏(彫刻作家)、角康二氏(沈金作家・日展会員)、細川英邦氏(輪島市産業部漆器商工課漆器産業振興室次長)

日時…10月28日(日) 午後1時30分～午後3時 *受講無料

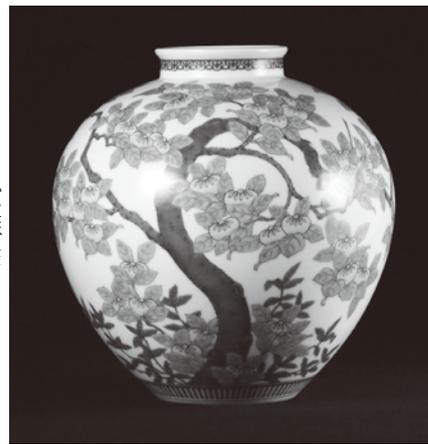
重要無形文化財保持団体秀作展 「日本の伝統美と技の世界」

会期 11月10日(土)～12月10日(月) *会期中無休

日本では歴史上または芸術上価値の高いものが文化財として国から指定されています。このうち、建造物や美術品と異なり音楽や演劇など形のないものは無形文化財とよばれますが、工芸品を作る「技」そのものも無形文化財です。個人の技を指定するいわゆる人間国宝に対し、地方的特色が著しく集団(団体)によって完結する制作技術として、輪島塗などが国の重要無形文化財に指定されているのです。

重要無形文化財の技を集団で守り伝える保持団体は、現在16ありますが、昨秋認定されたばかりの2団体を除いた14団体の技の結晶をご紹介しますのが本展覧会です。

14団体が各々手がけるのは、陶芸・染織・漆芸・和紙などいずれも永い歴史を誇り日本を代表する工芸品です。どの団体も伝統的な素材や工法を守りつつ今を生きる人々の心に訴えるもの作りに励む一方、伝統を未来へ繋ぐ伝承者養成事業に取り組んでいます。展覧会ではその作品のみならず、製作工程パネルや手にとっていただけに見える見本品を通して、多くの方々に貴重な工芸技術へのご理解を深めていただきたいと思います。



「色鍋島橘絵花瓶」
色鍋島今右衛門技術保存会

佐賀県の「色鍋島」は青みのある上品な釉肌に華やかな絵付けが施された焼き物です。青の染付と赤・黄・緑の絵付けが鮮やかで、その洗練された意匠には現代的な印象を受けることでしょう。



「蛸」
重要無形文化財久留米絣技術保持者会

福岡県の「久留米絣」は、細かな絣模様が特徴的な織物です。木綿糸を天然藍で染める際にあらかじめ防染箇所を作っておき、これを織り上げて様々な文様を表現します。緻密な計算に基づいて構成された柄の面白さが際立ちます。

このほか、「輪島塗」をはじめ「柿右衛門(濁手)」、「小鹿田焼」、「小千谷縮・越後上布」、「結城紬」、「喜如嘉の芭蕉布」、「宮古上布」、「久米島紬」、「伊勢型紙」、「石州半紙」、「本美濃紙」、「細川紙」などバラエティに富んだ工芸の世界をお楽しみいただければ幸いです。

なお、会期中には「輪島塗」、「色鍋島」、「伊勢型紙」の実演等も実施いたします。熟練の職人たちによる技を間近にご覧いただけますのでぜひご来場下さい。

(全国重要無形文化財保持団体協議会)

輪島大会実行委員会事務局

●実演

11月22日(木)・23日(金・祝)

輪島塗技術保存会(体験も可)

11月23日(金・祝) 色鍋島今右衛門技術保存会

伊勢型紙技術保存会

●作品解説

11月22日(木) 輪島塗技術保存会

※本展覧会は金沢市でも開催されます。

詳しくは全国重要無形文化財保持団体協議会のホームページをご覧ください。

<https://www.zenjukyoinfo/>

漆の小箱 24

漆の加飾 — 平文 —

平文という装飾技法をご存知でしょうか。平文は、金・銀・錫などの金属板を模様の形に切り透かし、それを漆の錆地面または、中塗り面に貼り付けて、その上に漆を数回塗り重ね、全体を研ぐことで、金属の部分が研ぎ出され、文様が表れるという技法です。金銀粉を用いて加飾する蒔絵よりも、強い光を表すことができるため、装飾性に富み、強い意匠効果を表すことができます。奈良時代に中国から伝来し、正倉院宝物では「漆胡瓶」や「金銀平文琴」などで見ることができません。奈良時代以降は蒔絵にとつて代わられ衰退してしまいました。

この失われて久しかった平文の技を独自に創造し、平文の復興、そして平文を用いた新しい表現を切り拓いた人物がいました。重要無形文化財「蒔絵」保持者の大場松魚です。大場は金沢市出身で、石川県立工業学校（現・石川県立工業高等学校）図案絵画科を卒業後、塗師であった父のもとで髹

漆の修業を積みました。この経験が「平文の大場」の大切な基礎を築きました。というのも、平文は蒔絵よりも髹漆の技法の力量に依るところが大きいのです。父のもとでの10年の修業の後、上京し、同じ金沢出身の漆芸家で東京美術学校（現・東京藝術大学）教授であった松田権六に師事しました。松田への弟子入りを契機に積極的に創作活動を行うようになります。

1948年第4回日展に「漆之宝石箱」を出品して特選を受賞します。この装飾には、金の板金が使われているのですが、大場は「平文」という技法であることを知りませんでした。古代の技術を独自の創意により復活させたのです。自分が行っていた技法は「平文」である、と知るきっかけになったのが、1952年に行った第59回伊勢神宮式年遷宮にかかる御神宝（御鏡箱・御太刀箱）制作の時でした。これ以後、大場は金属板の持つシャープで力強い意匠効果を生かした平文技法の作品を発表するようになります。

当館が所蔵する「平文富士光々之棚」は1995年第42回日本伝統工芸展の出品作です。富士山を膨らみのある柔らかくも

シャープな平文の線であらわし、その背後には大きな金平目、青貝、平目粉を用いて、輝く日輪とその光明を圧倒的な存在感で示しています。富士のふもとには舞い飛ぶ鳥を平文で表し、その姿は底板の黒漆塗面に映りこんで、富士の足元に水面が広がっているようにも見えます。地袋には四季の花を、平文を用いて抽象的な姿で表しています。大場が独自の表現技法として会得した技術が随所にちりばめられた優品です。

（高津綾乃）



平文富士光々之棚 大場松魚作
1995年第42回日本伝統工芸展

企画展「ハングズ・オン!—輪島塗のわざ—」

会期 12月14日(金)〜2019年1月14日(月・祝) *会期中の休館 12月29日〜31日

一般的に高級漆器のイメージが強い輪島塗ですが、日常の生活に華やかさを与える工芸品として昔から人々に親しまれてきました。

輪島塗は1977年に文化財保護法に基づいて漆芸分野ではいち早く国の重要無形文化財に指定され、その保持団体として輪島塗技術保存会が認定を受けています。

本展覧会では、伝統の技を現在に伝える輪島塗技術保存会の歴代会員作品や20年以上にわたって実施してきた伝承者養成事業の研修成果作品を中心にご紹介します。

「菊文沈金蒔絵懸盤一式」(図1)は同会



図1 「菊文沈金蒔絵懸盤一式」
(1990年度)

このほかにも、木地や沈金・蒔絵の工程見本など実際に手で触れることのできる輪島塗も展示します。職人の研ぎ澄まされた熟練の技をどうぞ肌で体感してください。

(山内亜沙美)



図2 「蝶蒔絵文箱」
(2015年度)

個々の伝承者の成果作品では瑞々しい世代が創り出す輪島塗をご覧いただけます。彼らの作品群からは受け継がれてきた技を習得しようとする気概が感じられます。

員が総力をあげ、5年の歳月をかけて完成させた作品です。木材には上質なヒノキを用いて、歪みが生じない丈夫な素地づくりがなされています。また、全て国産漆による塗りには、堅牢な髹漆技術が生かされています。加飾は蒔絵の上に沈金を彫り重ねてあり、細部の表現にまで工夫が凝らされています。

▼輪島漆芸美術館友の会「夏季見学会」

実施報告



7月19日(木) 参加者32名

◇富山市ガラス美術館(富山市西町)

◇富山県美術館(富山市木場町)

世界的建築家隈研吾氏設計による富山市ガラス美術館と、2017年8月にリニューアルオープンした富山県美術館、話題の2館を巡りました。たくさんのご参加、誠にありがとうございました。

INFORMATION

漆文化セミナー

▼ 第2回漆文化セミナー

テーマ 「伝統の本質を追求する—乾漆造形を通じて—」
 講師 林 暁氏 (富山大学芸術文化学部教授)
 日時 9月29日(土)

▼ 第3回漆文化セミナー

テーマ 「文化功労者 三谷吾一氏の足跡を振り返る」
 講師 三谷 慎氏 (彫刻作家)、角 康二氏 (沈金作家・日展会員)
 細川英邦氏 (輪島市産業部漆器商工課漆器産業振興室次長)
 日時 10月28日(日)

▼ 第4回漆文化セミナー

テーマ 「漆の植物学」
 講師 鈴木三男氏 (東北大学名誉教授)
 日時 11月18日(日)
 *いずれも当館講義室にて開催・午後1時30分から午後3時まで
 *受講無料・予約不要

TOPICS

▼ ミニピアノコンサート

日時 9月8日(土) 午後2時～3時
 演奏 高村 聡氏
 会場 エントランスホール *入場無料

▼ ふれて感じる、漆の温もり企画

日時 9月15日(土)、16日(日)、17日(月・祝)
 午前9時～午後5時 (最終日は午後4時まで)

▼ ちりめん細工作品展—わらべの四季—

会期 9月15日(土)～24日(月・振休)
 午前9時～午後5時
 協力 裏野芳子氏
 会場 エントランスホール *入場無料

▼ 満65歳以上の輪島市民 入館料無料

9月15日(土)～24日(月・振休)

▼ 石川県輪島漆芸美術館友の会主催

小さな大木 大きな宇宙 小品盆栽 七浦正一展

会期 9月22日(土)～9月24日(月・振休) 午前9時～午後5時
 *最終日は正午まで
 会場 講義室 *入場無料
 共催 石川県輪島漆芸美術館
 後援 輪島市教育委員会、輪島市文化協会、北國新聞社

▼ 「いしかわ文化の日」全館特別無料開放

10月21日(日)

▼ 「輪島市民文化祭」協賛 全館特別無料開放

11月3日(土・祝)・4日(日)

*内容は予告なく変更することがあります。詳細はHPをご覧ください。

休館日

2018年9月4日(火)～7日(金)・2018年11月6日(火)～9日(金)
 2018年12月11日(火)～13日(木)・2018年12月29日(土)～31日(月)



漆芸美術館だより 第84号

2018年8月31日

編集・発行 石川県輪島漆芸美術館
 〒928-0063 石川県輪島市水守町四十苅11番地
 TEL. 0768-22-9788 FAX. 0768-22-9789
<http://www.city.wajima.ishikawa.jp/art/>